



子どもと保護者と保育者とともに育つ幼稚園

副園長 高田 和 宜

進級児・新入園児ともに園の生活に慣れてきて、自分の好きな遊びを友達と楽しむ姿が見られるようになっていきます。保育参加や保育アシスタントでは子どものありのままの園生活や遊びの姿を目にされたことでしょう。幼稚園でのびのびと自分らしさを発揮して主体的に楽しめることは、日々の遊びの中で小さな成功体験を積み重ねていくことにつながっていきます。その小さな成功体験の積み重ねが、意欲や自己有能感を上げてくれます。これと同様に子どもの主体的な遊びの場では小さなトラブルは頻繁に起こってきます。このトラブルは育つために必要な機会であることを大人が理解しておく必要があります。

子どもが小さなトラブルを乗り越える体験は、我慢強さや調整能力、チャレンジ精神が鍛えられます。

しかしながら、幼児期のトラブルは同じようなことが何度も繰り返されます。ぶつかるのに離れないのは興味関心の傾向が似ているからです。ぶつかりやすいこともあります。相乗効果で伸びる仲間になれる関係と言えます。

また、トラブルに大人が介入してもすぐに改善されないのは、子どもがトラブルから学べていないからだけではありません。個々の子どもの特性を自分でコントロールできるようになるまでは周りの理解と配慮が必要です。本人を責め立てたり、怒ったりして行動を止めることでは学べないこと、根本的に改善されないことが行動心理学の知見で分かっています。学ぶためには自分で解決しようとして達成された小さな成功体験とその喜びの共感が有効です。そのための支えを周りの大人や友達がしてくれることが必要です。

子どもにかかわる大人は、「トラブルはあってはいけないこと」ととらえるのではなく、トラブルをどう子どもたちが乗り越えていけるかに心を寄せていくことが大事です。子どもは良い悪いを決めることでは解決しないことや相手を責めることでは状況は変わらないことなどを遊びながら体験的に生々しく学んでいきます。

一方で、幼児期は他にうれしい、楽しいが見つかったり、相手と共感できたりすると相手を許せたり、忘れたりしやすい特徴があります。おもちゃの取り合いで取っ組み合いになっていても、その後すぐに一緒に遊べるのは幼児期にはよくあることです。

幼児期のトラブルの多くは言葉が足りないことでのすれ違いや誤解がほとんどといって過言ではありません。3歳児では「貸して」「代わって」「待って」が言えるようになったり、順番を守る良さが分かったりしてくるとトラブルはかなり減ってきます。4、5歳になると仲間関係で少し複雑にはなりますが、言葉が足りていないことでもめることがやはり多いです。思いや考えを言葉で伝えあうことを園でも家庭でも意識して取り組むと効果は絶大です。

心の切り替えはかえって大人のほうが難しいこともあります。大人が子どもと一緒に落し込んだり怒ったり、不安になったりすることは子どもの育ちにはつながっていきません。大人の不安定さが子どもを余計に動揺させることもよくあることです。そんなときには迷わず園に相談しましょう。附属幼稚園は子どもも保護者も先生も一緒になって育っていきましょうという場ですので、子育てで心がもやもやしたり、ざわざわしたりするときは遠慮せずに相談してください。すぐに解決できるとはかぎりませんが、一緒に考えてよりよい方向性を見つけていきたいと思います。